

実存的不安尺度 (ECQ) 日本語版作成の試み

大学生女子を対象とした予備調査

○山崎洋子¹・高村愛²・大森美香¹

(¹お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所・²お茶の水女子大学大学院)

キーワード：実存・不安・尺度作成

The preliminary study of development of Existential Concerns Questionnaire in Japanese female students.

Yoko Yamazaki¹, Ai Takamura², and Mika Omori¹

(¹Institute for Education and Human Development, Ochanomizu Univ., ²Graduate School of Human and Science, Ochanomizu Univ.)

Key Words: existential, anxiety, scale development

目的

実存的不安とは、具体的な脅威を超越した、人間の存在そのものに関する究極の不安のことである。実存的不安には、「死が不可避である」ことに対する不安、「自分の人生には意味がない」という経験に関連する不安、「人間は所詮一人である」という根本的な孤独感などさまざまな側面がある。また、実存的不安は、思考や感情、精神病理の理解に重要であると指摘されている。

近年、実存的不安について実証的な研究が多くおこなわれている。たとえば、社会心理学の存在脅威管理理論 (Koole et al., 2006) の研究で、「死が不可避である」ことに対する不安が人間に与える影響を防衛機制という観点から検討している。また、メンタルヘルス領域では、「死に対する不安」と精神病理との関連が実証的に検討されてきた。心理療法開発の先行研究では、治療において実存的な経験に注意を向けることの効果が実証的に検討されている。このように、先行研究の多くは、「死に対する不安」を扱った研究である。しかし、実存的不安は多くの側面を持っている。

我が国の実存的不安に関連する先行研究においては、主に高齢者を対象に「死に対する態度」や「生きがい」についての検討が行われてきた。「死に対する態度」や「生きがい」は実存的不安の側面であり、包括的に実存的不安をとらえてはいない。

そこで、van Bruggen ら (2017) は、実存的不安とメンタルヘルスとの関連の十分な理解には、包括的に実存的不安をとらえる必要があると考え、包括的に実存的不安を測定する Existential Concerns Questionnaire (以下 ECQ) を開発した。ECQ は「死」、「意味のなさ」、「罪悪感」、「社会的孤立」、「アイデンティティ」の 5 領域を網羅している 22 項目で構成されている。

本研究は、ECQ (van Bruggen et al., 2017) の日本語版を作成しその信頼性と妥当性を確認することを目的とした。ECQ の日本語版は精神病理との関連だけでなく、例えば居場所感の研究などさまざまな文脈における研究に利用できると考える。

なお、本研究は予備調査として大学生女子対象に実施された。

方法

本研究はお茶の水女子大学の倫理承認を受けて行われた。**調査協力者および手続き** 都内に位置する女子大学の学部生および大学院生 268 名から有効回答を得た (回収率 68.2%)。平均年齢は 19.4 歳 ($SD=1.2$) 年齢の範囲は 18 歳~24 歳であった。**手続き** 配布の際、研究の趣旨やプライバシー保護等の説明を行い、同意を得た後、記入を求めた。回収は後日行われた。**調査内容** 無記名式の質問紙調査であった。

実存的不安尺度日本語版 邦訳後、翻訳業者が back translation し、その意味内容についてネイティブに確認を行った。

構成概念妥当性確認のための尺度 構成概念妥当性確認のための変数は、van Bruggen ら (2017) の研究を参考に選択された。

使用尺度は、日本語版「人生の意味尺度」(MLQ) (島井他, 2005)、死に対する態度尺度 (DAP) (河合他, 1996)、Big Five 尺度 (N)

(和田, 1996)、The short intolerance of uncertainty scale 日本語版 (IUS) (不確実さ不耐性) (竹林他, 2012)、新版 STAI の特性不安 (肥田野他, 2000) で、その他、年齢・性別をたずねた。

結果

実存的不安尺度日本語版の構造と内的一貫性の確認 オリジナル同様に一次元の尺度であるかを確認するために主成分分析を行った。その結果、すべての項目で第 1 成分の負荷量が .51 以上を示し、寄与率は 48.5% であった。なお、 α 係数は .95 であった。**構成概念妥当性の確認** 妥当性確認のために実存的不安尺度日本語版と各尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した。先行研究 (van Bruggen, 2017) と本研究の結果を以下に示す。

Table 1 先行研究および本研究における ECQ と各変数の相関

測定対象	van Bruggen の研究 (2017)		本研究 (日本語版)	
	使用尺度	r	使用尺度	r
不安	DASS 21	.62	STAI_trait	.64
人生の意味-探索	MLQ_search	.38	MLQ_search	.26
人生の意味-保有	MLQ_presence	-.45	MLQ_presence	.27
死に対する態度	DAP	.53	DAP	.53
神経症傾向	IPIP_N	.67	Big Five_N	.64
不確実さ不耐性	IUS	.52	IUS	.58

考察

本研究では、実存的不安尺度日本語版の作成を試みた。本尺度は一次元で、van Bruggen らのオリジナルと同様の構造となり、因子的妥当性は確認されたといえる。また、 α 係数も許容範囲内で、内的整合性に問題はないと考えられる。一方、構成概念妥当性に関しては、「人生の意味」以外は、中程度以上の関連が認められ、van Bruggen らの結果を支持するものであった。したがって、概ね構成概念妥当性は認められたと思われる。以上の結果は ECQ 日本語版が信頼性、妥当性に関して一定の水準を満たしていることを示唆する。しかし、「人生の意味」は実存的不安の重要な要素である。今回とは異なる尺度もしくは「人生の意味」に関連する要因との関連の検討を行う必要があると考える。

今後は、性差の検討も含め男子を対象にし、さらに本尺度の精度を高めるための検討を行う予定である。

引用文献

- van Bruggen et al. (2017). The existential concerns questionnaire (ECQ): Development and initial validation of a new existential anxiety scale in a nonclinical and clinical sample. *Journal of Clinical Psychology*, *73*, 1692-1703.
- Koole et al. (2006). Introducing science to the psychology of the soul: Experimental existential psychology. *Current Directions in Psychological Science*, *15*, 212-216.